

令和8年春季全国火災予防運動

実施期間：令和8年3月1日（日）～3月7日（土）

防火標語：『急ぐ日も 足止め火を止め 準備よし』

春の
全国火災
予防運動
3/1~3/7

住宅用火災警報器 交換のおすすめ
10年たったら、
とりかえ。

急ぐ日も
足止め火を止め
準備よし

制作：一般財団法人 日本防火・危機管理促進協会 後援：総務省消防庁 全国消防長会
このポスターは、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

月島瑠衣

（写真提供：一般財団法人 日本防火・危機管理促進協会）



北はりま消防組合

令和8年春季火災予防運動

令和8年3月1日（日）から7日（土）までの7日間にわたり、令和8年春季火災予防運動が全国的に実施されます。この運動は、火災が発生しやすい時季を迎えるに当たり、火災予防思想の一層の普及を図り、もって火災の発生を防止し、高齢者を中心とする死者の発生を減少させるとともに、財産の損失を防ぐことを目的として実施するものです。

重点推進項目

- (1) 住宅防火対策の推進
- (2) 地震火災対策の推進
- (3) 林野火災予防対策の推進



推進項目

- (1) 防火対象物等における防火安全対策の徹底
- (2) 製品火災の発生防止に向けた取組みの推進
- (3) 多数の者が集合する催しに対する火災予防指導等の徹底
- (4) 乾燥時及び強風時の火災に対する警戒の強化
- (5) 放火火災防止対策の推進



週間中の取組

火災予防運動では、期間中に掲げる重点目標に向けた取組として、「住宅防火 いのちを守る10のポイントー4つの習慣・6つの対策一」、「あぜ焼き・草焼きの注意喚起」及び「住宅用火災警報器の設置の徹底・適切な維持管理」について積極的に広報し、住宅における防火安全対策を進めるとともに、事業所での防火安全対策やあぜ焼きなどからの火災を予防するための対策を推進します。

また、関係機関、関係団体、事業所、自治組織及び地域住民とも連携し、それぞれの立場においてこの運動を積極的に展開し、火災及び災害に強いまちづくりの推進に取り組みます。

事業所の方へ



1 防火安全対策の徹底

事業所における火災は一般住宅と比べ、甚大な被害が予想されます。

『慣れ』や『油断』が火災を招くということを忘れず、日頃から火災予防を心掛け、事業所を自分たちの手で守るために、次のことを徹底しましょう。

(1) 避難経路の管理

チェック

- 避難口、避難経路を事業所全体で周知する。
- 災害時の避難誘導の役割を分担しておく。
- 避難口、避難経路付近に物が置かれたままになっていないか。



(2) 火気・設備の管理

チェック

- 火気の取扱管理は徹底できているか。
- 危険物の管理状態は適切か（転落防止措置など）。
- 設備等の故障はないか。定期的な点検を実施しているか。



(3) 消防訓練

チェック

- 消防訓練を計画的に実施しているか。
- 日時、場所、内容等、事前の計画に沿って実施できているか。
- 通報訓練は適切に行えているか。
- 地震に対応した訓練を実施しているか。



(4) 消防用設備等点検

チェック

- 消防用設備等の周囲は整理されているか。
- 消防用設備等の取扱方法が周知されているか。
- 日々の点検及び業者による点検を定期的実施しているか。



消防用設備等点検報告制度

◆点検の種類と期間

機器点検・・・6か月に1回

総合点検・・・1年に1回

◆点検防火対象物区分及び報告期間（消防署長への報告が義務）

- ・特定防火対象物 1年に1回（例）旅館、病院、社会福祉施設、飲食店、店舗など
- ・非特定防火対象物 3年に1回（例）工場、事務所、倉庫、共同住宅、学校など

◆点検資格者による点検が必要な防火対象物

1 消防設備士又は消防設備点検資格者による点検が必要

(1) 延べ面積1,000平方メートル以上の防火対象物

(2) 地階又は3階以上の階に特定用途（旅館、病院、飲食店、店舗など）があり、かつ、階段が屋内に1つしかないもの（屋外階段等があれば免除）

2 防火対象物の関係者 上記以外の防火対象物

消防設備士等に点検してもらっても構いません。

報告を怠ると・・・
罰則あり！

町内会・自治会の方へ

1 自主防災意識を高めるために

- (1) 自分の生命や財産は自分で守る。
- (2) 自分たちの地域は自分たちで守る。

これが自主防災の基本です。家庭内・町内会・自治会等で火災予防について考える機会を設け、いざという時にお互いが協力し、助け合う準備をしておきましょう。



2 放火火災に対する地域対応力の向上

放火されない環境づくりを推進するためには、住民一人一人が積極的に放火火災に対する注意を心掛けることはもとより、地域一体となって放火火災に対する対応力を向上させる必要があります。地域全体の安心・安全な環境の確保に向けた日頃からの取組が大切です。

3 住宅用火災警報器の設置の徹底及び適切な維持管理の必要性

住宅用火災警報器の設置が義務化され、その結果、住宅火災による死者数が減少するなどの効果が現れています。各地域から住宅火災による被害を出さないためにも、未設置世帯に対する設置の働きかけに、ご協力をお願いします。また、火災警報器は、古くなると電子部分の寿命や電池切れなどで火災を感知しなくなる恐れが高まります。10年を目安に交換しましょう！

4 寝たばこ注意！

住宅火災による死者数を発火原因別に見たとき、最も多いのがたばこであり、なかでも寝たばこによる死者が多く発生しています。寝たばこ火災を防ぐために、次のことを守りましょう。

- ・ふとんの中で吸わないこと。
- ・灰皿には水を入れておくこと。
- ・消えたかどうか絶対に確認をすること。



5 住宅防火 いのちを守る10のポイント

住宅火災による死者の半数以上は高齢者の方で、高齢化の進展に伴い、今後ますます増加する恐れがあります。住宅火災による死者の発生防止対策として、「いのちを守る10のポイント —4つの習慣・6つの対策—」について、各家庭、各地域に浸透するよう、ご協力をお願いします。

6 あぜ焼き・草焼きからの火災予防

あぜ焼き・草焼きの火が山林に延焼し山火事や、住宅に延焼することがあります。

あぜ焼き、草焼きの火災は、火入れしている人たちの慣れや慢心が一番の発生原因だと言えます。あぜ焼きなどをされる場合は、風の状態や周囲の状況などに十分注意していただくとともに、林野火災注意報又は火災警報発令時は火の使用制限を守っていただく必要があります。

住宅火災を防ぐには 《4つの習慣6つの対策》

住宅防火 いのちを守る **10** のポイント

4つの習慣

- 

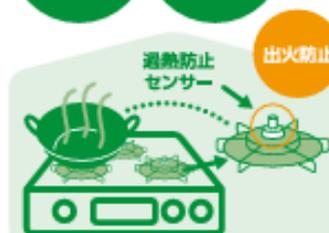
1 寝たばこは絶対にしない、させない
- 

2 ストープの周りに燃えやすいものを置かない
- 

3 こんろを使うときは火のそばを離れない
- 

4 コンセントはほこりを清掃し、 unnecessary プラグは抜く

6つの対策

- 

1 火災の発生を防ぐために、ストープやこんろ等は安全装置の付いた機器を使用する
- 

2 火災の早期発見のために、住宅用火災警報器を定期的に点検し、10年を目安に交換する
- 

3 火災の拡大を防ぐために、部屋を整理整頓し、寝具、衣類及びカーテンは、防災品を使用する
- 

4 火災を小さいうちに消すために、消火器等を設置し、使い方を確認しておく
- 

5 お年寄りや身体の不自由な人は、避難経路と避難方法を常に確保し、備えておく
- 

6 防火防災訓練への参加、戸別訪問などにより、地域ぐるみの防火対策を行う

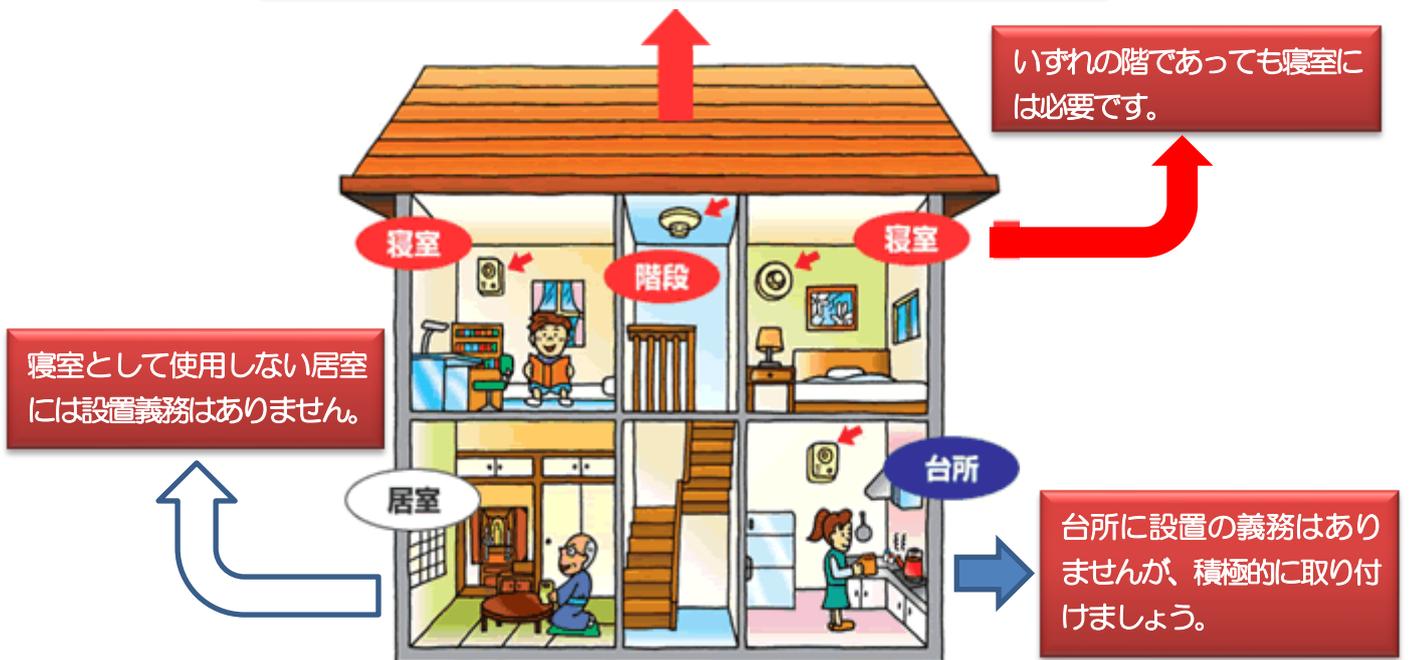


住宅用火災警報器の設置と点検

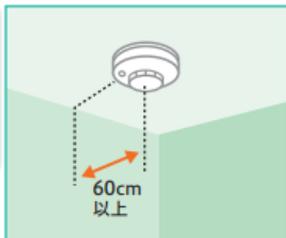


1 住宅用火災警報器を取り付ける場所

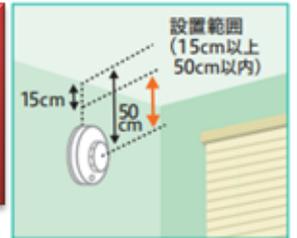
- ① 2階以上の階で、寝室のある階の階段の上端等
- ② 7㎡（4畳半）以上の居室が5部屋以上ある階の階段の上端等
- ※ ②の階の廊下に設置した場合、階段部分は不要



- 天井に取り付ける場合
火災警報器の中心を壁から
60cm以上離します。



- 壁に取り付ける場合
火災警報器の中心が天井から
15cmから50cmの範囲
にくるようにします。



2 住宅用火災警報器の点検



「ボタンを押す」

or



「ひもを引く」

※ 機器により点検方法や警報音は異なります。

正常な場合 「ピーピーピー」、「ピーピーピー火事です」、「正常です」など

電池切れの場合 「ピッ…ピッ…」 1回を定期的に鳴動

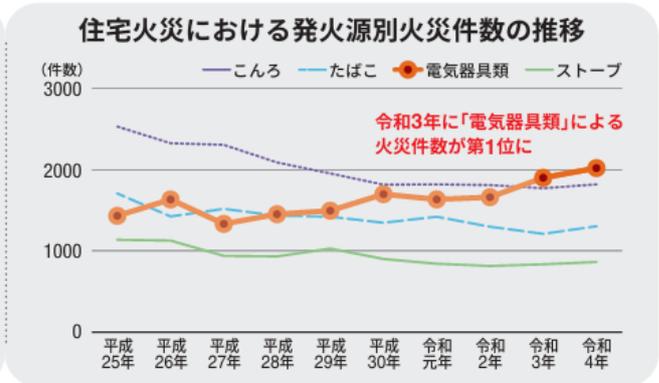
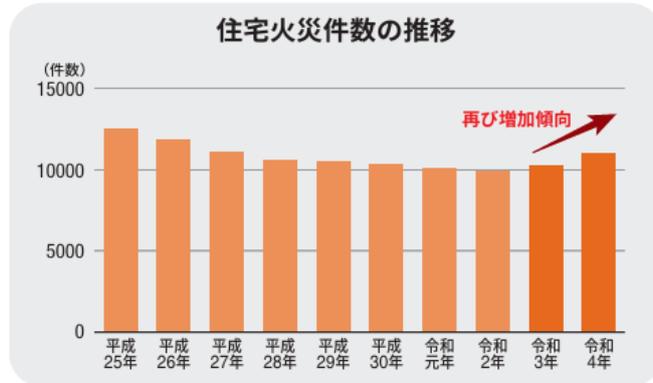
故障の場合 「ピッピッピッ…ピッピッピッ…」 3回を定期的に鳴動

住宅における電気火災に注意



近年の住宅火災の傾向

近年、**電気器具類を発火源とする住宅火災の件数が増加**しています。



住宅における電気器具類を発火源とする火災について調査・分析した結果、以下の**3つが主な出火原因**であることがわかりました。

充電式電池・リチウム電池

近年火災原因として増加が著しいのが、モバイルバッテリーのように**繰り返し使える充電式電池**です。以下のような火災事例があります。

▶▶ 電池を捨てる際に、適切に処理せず発火

リチウム電池では、電池を処分する際に絶縁テープなどで絶縁処理をしないと、電池同士が接触により放電して発火する場合があります。



▶▶ 暖房機器で暖められ、内部に熱がこもり発火

充電式電池を暖房機器近くに置くなどして暖めると、内部に熱がこもり電池を損傷させ発火する場合があります。



▶▶ 水に落としたことによる発火

洗面所などで水に水没させた場合、内側に水が浸み込み、異常が生じ、通電時などに内部でショートして発火する場合があります。



▶▶ 落下による発火

落下などにより、大きな衝撃が加わると、変形や電池内部の損傷により、発火することがあります。



▶▶ 低温下で充電したために発火

低温下での電池の充電は、電池に損傷を与える恐れがあり、発火に至る可能性があります。



火災予防対策とまとめ

充電式電池は、説明書をしっかり確認し使用方法を守るとともに、電池をぶつけたり、濡らすなどしてしまった時は、電池に異常がないかしっかり確認し、電池が膨らむなど少しでも異常があれば、使用をやめましょう。充電式電池は近年使用が増え、それに伴い火災件数も増えています。原因は様々で、使用方法の不備や改造、製品の不良などがあります。PSEマークが表示されているかなどを確認し、一定の安全が確保されているものを使用し、火災を起こさないようにしましょう。